

# ブックガイド

No. 18 2016. 2. 27

## ■原子力問題

『プロメテウスの火』

朝永振一郎/著 みすず書房 2012. 6 539. 04/トシ 126

ノーベル賞受賞者として戦後の科学界をリードした朝永振一郎（1906-1979）。本書は彼の著作・講演の中から、震災後に読まれるべき11編を3部に分けて構成しています。人類と科学との関係に対する鋭い問題意識は、私たちに年月の隔たりを感じさせません。第3部の座談3編では、原子力開発への最初の岐路に立った50年代の科学者たちの期待と危惧から、あらためてその後の道程を考えさせられます。

## ■文学 体験記

『復興なんて、してません 3・11から5度目の春。15人の“いま”』

渋井 哲也/著 | 長岡 義幸/著 | 渡部 真/著 第三書館 2015. 4 LS369. 31/S46/1

震災から5度目の春を迎えた被災地。福島県・宮城県・岩手県の被災者の今が綴られています。対応に追われた1年目、2年目と違い、インフラ等の復興が進む一方、被災地内外に関わらず、風化も感じられるようになりました。しかし、身内をなくした人、家が被災した人、避難が続く人、それぞれがまだ迷い戸惑いの中にいます。震災のとらえ方は人それぞれまったく異なりますが、ひとりひとりが自分のこれからの人生をどう生きるのか模索しています。

## ■復興 防災

『アーカイブ・ボランティア～国内の被災地で、そして海外の難民資料を～』

大西 愛/編 大阪大学出版会 2014. 6 018. 09/オ7 146

人びとの活動によって生じた様々な記録をまとめ、整理し保存するのがアーカイブです。震災や戦災などの混乱した状況下では個人のボランティアが力を発揮することがあります。本書では国内外での事例を紹介し、また原子力災害下での活動について問題点を明らかにしています。多くの業績も失敗も未来のために保存する作業は、震災の風化が問われ始めた今だからこそ考えておきたいものです。

『未来が見えなくなったとき、僕たちは何を語ればいいのか』

震災後日本の「コミュニティ再生」への挑戦』

ボブ・スティルガー/著 野村恭彦/監訳 英治出版 2015. 6 369. 31/林 156

著者は、地域や組織に変革をもたらす対話の場づくりのプロで、震災後はたびたび来日して復興のための対話に関わってきました。著者が活動の中で出会った友人に向けた「自分にとって震災の前と後とで変わったことは何か」という質問への答えは、私達にも多くの示唆を与えてくれます。震災が自分の意識や自分の所属する組織に与えた影響、そしてこれから目指したい姿をあらためて考えさせる本です。

## ■復興 防災

### 『忘却しない建築』

五十嵐太郎/著 春秋社 2015.9 520.4/㍻159

3.11直後から被災地をめぐる建築家が「カタストロフから始まる建築」をルポルタージュ。建築家岸田日出刀が空襲で焦土と化した東京を見て「あーきれいだ」と賞賛したそうですが、戦争や災害によって失われた街にはよりよく発展するチャンスが見出せるといいます。首都機能を福島へ移転する案や福島第一原発観光地化計画などを紹介する中で、ダークツーリズムや震災遺構の継承が、記憶の風化を防ぐ一つの有効な手段であることを伝えています。

## ■こども向け

### 『被災地の人のSOS』

河東田博/著 ゆまに書房 2015.5 369/㍻6

地域の人々と共に生活していた障がいのある人たちが、震災により人や町や風景との絆が絶たれ心細く不安な思いをしました。地震や津波により建物や町だけでなく、文化や人間関係も壊れてしまったのです。本書では、様々な障がいをもつ人に、震災のとき何がおこり、何が問題で、今どうしているのか聞き取りをし、これからも被災地で支えあいかわりあいがながら暮らすためには何が必要なのかを紹介しています。知ることは、小さなSOSの声に耳を傾ける社会への第一歩です。

## ■その他のジャンル

### 『フクシマ発』

フクシマ未来戦略研究所/企画編集 現代書館 2015.10 LS369.31/F29/1

開沼博や和合亮一、赤坂憲雄といった著名な方から、地域の企業家や街の人々までの幅広い意見を集めた‘福島の実況を問う’一冊です。編集長(吉田国吉)は「帰りたいという気持ちを逆手にとって、問題が解決しないまま帰されても、帰還者は高齢者ばかりで、その他の世代が非常に少なく、家は野生動物や放射能に荒らされ、隣には危険な原発。」と書いています。それぞれの立場から語られる原発事故後の苦悩と再生・復興へのありようが、必死で這い上がっている今を浮き彫りにしています。

### 『表現者たちの「3・11」 震災後の芸術を語る』

山内 宏泰/[ほか著] 河北新報出版センター 2015.3 702.16/㍻153/

芸術家たちは震災とどう向き合い、どのような表現をしてきたのでしょうか。この本は東北ゆかりの芸術家35人にインタビューをした『河北新報』の連載記事が元になっています。震災を前に、芸術は人々に何ができるのか、文学で、音楽で、美術で、震災を語る芸術家たちの苦悩や怒りが伝わってきます。芸術が人の心によりそうものである限り、芸術であるがゆえにできる復興支援があるのではないか、そんなことを考えてみたくなる一冊です。